躾の二方面について

大塚喜一

今秋の關西聯合保育會に京都市から『幼兒の躾方について』といふ談話題が提出されてゐるのが特に注目に値する。苟くも保育に從事する者にとりて、幼兒の躾方とか訓育とか性情の涵養とか其他之に類する言葉を以て表はされてゐる教育事業は、最も困難にしてしかも重要なる問題と痛感せられてゐる事であらう。『教育は人をして人たらしむるにあり』との一般目標は我等の受持つ幼兒教育に於て如何なる姿態を以て現はれて來るものであらうか。基本教育の特質から見て保姆としての獨特の努力は此の方面に如何なる形態に於て爲さるべきものであらうか。吾人は讀者諸士と共に保育者としての使命に立脚してこの問題を考へて見たいと思ふのである。

幼兒の躾方と云へば、先づ普通に考へられるのは善良なる習慣の養成といふ事である。父母に對して先生に對し友達に對して斯くすべし斯くすべからずといふ實行要目を教ふる事である。幼稚園令施行規則第一條の中に『常ニ善良ナル事例ヲ示シテ之ニ倣ハシムコトヲ務ムヘシ』と述べてある通りで、其の必要なる事は今更云ふまでもない。しかし意識的計畫的に幼兒をして倣はしめむとして爲したる模範は其効割合に薄く、却て不知不識の間に保育者の人格的感化が幼兒の性情に浸潤して行く『無爲にして化す』といふべき影響の深きを思へば、『善良なる習慣』は幼兒よりも先づ保姆その人に求めねばならなくなり、茲に躾方の問題は保姆の修養の問題に歸する事となる。かくして、

躾の二方面

遠心的——性情の涵養——無意識的感化

求心的——善良なる習慣の養成——具案的指導

基本教育の本質原理としての『未分化の教育』より云へ

ば一々の德目を標準とするよりもそれ等の根源ともなるべき幼兒の純なる性情の涵養こそ保育者の使命として特に努力すべき要點である。これについては昨年七月文部省の講習に於て倉橋先生が『**幼兒性情の涵養**』なる題下にいとも懇切に述べられたる所に學ぶこと大なるものがある。本講に出席し得ざりし方は本誌昨年九月號の筆記と幼稚園雜草中の『うるほひ』『まこと』『親しむ心』『斯く育てたしと思ふ事』等の項とを心讀してせめて其大體の精神だけでも感得せられたいと思ふ。

嘗て本誌本年一月號四四頁に紹介したる**福島政雄先生著『日本女子教育學』**中の一節にこゝに引用するにふさはしい所があるから、左に記して話を進めて行きたいと思ふ。

（前に記したるつゞきである）

×

イタリアの小說『愛の學校』といふ書物を讀んだことのある人はその中に次のやうな話があるのを記憶してゐるであらう。

新しい受持の先生が書取をしながら机の間を歩いてゐると、顏に赤に粒々の出てゐる子供がゐた。先生が書取を中止して兩手でその子の顏をはさみながら、どうしたのか、熱はないか等と尋ねてゐると、先生の後の子供がフイと腰掛の上に立つて操人形をやり出した。先生が不意に後をむかれたので、その子供は落ちるやうに腰をかけたが、首をたれて叱られるのを待つてゐる。すると先生はその子の頭を撫でながら『またとそんな事をしないのですよ』と云はれる。ただそれだけである。

書取がすんでから、先生は少しためらひながら、しかし靜かな親切な聲でかう言はれた。『皆さん、私共はこれからこの一年間を一緒に過すのだから、これを善く過さうではありませんか、私には一人の家族もありません。皆さんが私の家族です。去年までは母が生きてゐましたが、母が死んでからは全くの孤獨です。皆さんの外にこの世界中に私の家族は一人もありません。皆さんは私の子供です。皆さんは全級一家族となつて私の慰藉となり、私の誇となつて下さい』

放課の鐘がなつて皆が靜かに立つた時、操人形をした

子供は先生の側に行つて慄聲で『先生許して下さい』と言つた。

この先生の態度にはうち開いたところがある。心の扉を開放して子供達のとび込むに任せ、ともに喜びともに泣いて、手をとりあつて人間の道を進まうといふ親切と同情とがある。それで悪戯をした子供もすつかり悔悟したわけであるが、恐らくその外の子供達もみんなこの先生が好きになつたのであらう。そして喜びも悲しみもうちあけられるやうな親しみを持つたに違ひない。先生もまた子供達が自分の子のやうにいとしく感せられたであらう。教育はこの二つの心の融和から出發するものである。

×

保姆諸彦はこの一節を讀んで如何に感ぜらるゝか。母を求むる心を子供たちの方へ持つて行つてゐる……この**子心の自覺**に入れる先生の態度から、子供たちに對しておのづから融和の心が湧き出て來てゐる情景が切實に表現せられてゐるではないか。

愛は愛することによつて憶はる。

ペスタロツチー

小原國

恩師小西重直先生の著書『教育の本質觀』（玉川學園發行）を購入の際小原先生にサインを求めた時、斯く書いて下さつた。まことに至純なる愛こそは教育の生成すべき淵源であり母胎であり、人の子が人として生長すべき生命の源泉である。或る夜、幼兒の性癖矯正に關する同志の友の涙ぐましき體驗談に心耳を傾けたる時、僕は長大息の後、『性癖矯正は愛と理解から』と叫ばざるを得なかつた。次に記すはこの友からの音信の一節である。

×

床の中からお便り申上ます。先生にお便り申上げて翌日（十九日）幼稚園で足を犬にかまれました。その朝は頭が痛く家を離れるのがいやで、殊に父母がなつかしく涙ぐましい氣持で父母をみつめながら思ひきつて家を出たのでした。こんな私事におぼれてはいけない。幼稚園には責任の重い仕事があるのだ。可愛いゝ子供達が待つてゐるのだ。

……と思ひつゝ道を急ぎました。

晝まで樂しく過し午後一時一寸前、子供とお庭で遊んでゐると、突然犬のケンカが始まりました。小さい子供達五六人とても連れて逃げる事は出來ませんので私は一生懸命に子供を抱きしめてゐました。そこへ小さい方の犬が私の足の許ににげて來ました。大きい犬はとんで來てその小犬とまちがへて私の足をブツリとかみました。その時、あゝ、私でよかつた、子供でなくて！　子供でなくて！　と思ひ、いたみも感じませんでしたが、すべての仕事をすませ、家に歸り母の顔を見たら、ただ情ない思ひがこみ上げて來ました、足もはげしく痛み出しました。

二日、床の中で過し三日目幼稚園に出ました。ただ〳〵子供に逢へたうれしさと、皆様の御親切に感謝して一日を過し、歸つて來てまた發熱、傷の方は大體よくなつたのですが、今日まで幼稚園の方をおやすみしてしまひました。幸ひ日曜日や祭日は心のどこかに休めますが、平日は子供の事や先生方の事を考へると申譯なくて早く起きて行きたい〳〵と心のみあせります。でも、とう〳〵行かれる日が來ました。

明日！　子供も私も新鮮な氣持で相ひ逢ふのです。毎日逢はない。それは淋しいかも知らないけれど、然しお互にお互の尊さ切實さを深く味ひかみしめる爲には、むしろ喜ぶべき事だと思ひました。私も幼稚園なしの、いや子供達なしの生活は、私にとつては意味ないといふ事がはつきりわかりましたし、子供達も切に〳〵私の來るのを待つてゐるといふ事を知りました。

私はも一度、幼稚園にとびこんでゆきます。やさしい、靜かな、なごやかな母の心もちを胸に抱いて。

×

子供達を自己の生命の一部として要求する心の態度こそ、實に我等の眞實なる道であると思ふ。この純なる一道に參する者にして甫めて其一言一行に光あり、たとひ言葉を用ひてゐる時でもその先生の心は子供達の心の中に根をもつてその生長を保育してゆくのである。斯く觀じ來れば『愛の學校』の例は幼兒の訓育管理といふ方面にも貴重なる教訓を吾人に與ふるものである。若し教師が警察官にも

似たる態度を以て惡戯を爲せる子供を叱り飛ばしたならば、彼は止むを得ず其の命に從ふたであらう、全級の兒童は其威嚴にピリツとしたであらう。しかし、斯かる教師は子供を從へ得る自己の手腕を誇る事ありとも、自分が子供に從つて行く心の經驗を味はひ得るであらうか。まして子供たちと共に生きる心もち、寧ろ子供達のおかげで自分が生かされてゆくといふ感激感謝の涙にひたる事は思ひもよらぬであらう。現今保育の實狀より云へば、多くの幼兒達を狹い所で保育してゐる故に、いたづら、ケンカ等管理を要する事件が屢々起り時には本意ならずも制止せねばならぬ事もあらう。かくして外的な言葉や動作を用ひねばならぬ事ありとせば、尙一層內面的にその先生の性格として子供に忠實にして親切なる態度が必要であり、絕えざる心のうるほひが內からあふれてゐなければならぬ。(本年一月號卷頭の言『親切』參照)吾人は保姆養成の中心問題は實に玆に存すと思ふのである。外的管理さへ經驗と熟練とを要する。まして保姆の心の態度は多年自ら內に養ふ間に自然に徐々に育成さるゝものであるから、始めて幼兒の友となつて純眞なる處女の感激に生きつゝある保育實習生時代より斯かる心を養ふを以て、第一義の中心目標とせねばならぬ。それは彼女達を其の本然の若さに於て生かす所以であり、同時に保姆として最善の生涯に入る道である。此事は目下小生の胸裏を往來しつゝある最も大切なる問題であるから他日稿を新にして諸賢の教を乞ひたいと思ふ。

訓育管理に關する實際上の諸問題は、實地の經驗少なき小生の到底盡し得る限りではないが、玆には其根本的な態度に就て諸賢と共に考へたいと思ふのである。一々の實行要目を個々別々に幼兒に求めて行く時は、利害得失は夫々の場合により極めて多岐に分れて行くことゝなり、或は、『角を矯めて牛を殺す』の弊に陷る事もあるべく。斯くては幼兒の生活全體を生きた姿に於て保育すとの本義と全然反對の憂ふべき結果に終るであらう。我等が保育者の職責上幼兒に求めざるを得ざる實行要目も、『斯く行ひ得るには?』と幼兒の現在の生活に忠實にして同情ある心眼を向け來る時は、外からは惡癖や非行と見做さるゝ一々の行爲の源には、幼兒としては極く自然の當然の情緒、本能、欲

求、衝動等が動いて居り、それが周圍の狀況がこれを適當に子供らしく現はさせて呉れない爲に暗々裡に出よう〳〵として道を求めて苦んでゐる氣の毒な抑壓の下に潜在してゐる事を發見する事がある。（精神分析學的考察を參照せられたし）かう氣が附いて見ると、子供が惡いのじやない、實はこちらが行屆かないのだと反省されて來て、敎聖ザルツマンが『敎育者たる者は、自分の敎へ兒の一切の過失や非行の因由をば、省みて自分自身の上に求めなくてはならぬ』と誓はしめたる信經の至當なる所以を知るであらう。（ザルツマン原著、村上瑚磨雄譯『敎師と父母との再敎育』參照）

×

この稿を終るに當り、小生の日頃敬服してゐる或る先生の保育を親しく參觀させて頂いた實況を最後に紹介する。此事實は、保育の眞の價値は保姆の心の態度如何に依て定まるものなる事を明白に物語つてゐる。

保育室でのお辨當の時間、幼兒達は袋やふろ敷からお辨當を出して各自の前に置いた。お茶が配られ終ると先生は『さあ、みんなお茶を入れて頂きましたね』と、靜かに姿勢を正して眼を閉ぢられた。幼兒達もみんな眼を閉ぢて靜かになつた。僕も眼を閉ぢた。……沈默數秒。漸らく靜かであつたが、ふとかすかに聲がきこえるので僕は眼を開けて見ると、二三人の子供が何事かささやきながらあちこち見まわしてゐる。子供の視線はやがて先生の方へむいた。先生はさつきから眼をつむつたまゝじつとしてゐられるのでそれを見た子供は又もとの平靜に歸つた。

お辨當を頂きながら僕は先生に『いつ頃からこういふ風にしてゐられますか』と尋ねたら『これ位（一分間位か）するのは二年程前からだが、それ以前はもつと時間が短かつた』との事。聞けば先生自身靜座をしてゐられるのださうだ。

實は今日もこの原稿を書きつゝ丁度十一時になつたので、今一度この實景に接して新しい感觸を以て書きたいと幼稚園に先生を訪ふた。お辨當の時は二十餘名の年少兒が二個の机を圍んで椅子にかけた。沈默數秒、僕も靜かに瞑目して心氣を靜めてゐた。やがて樂しい食事が始められる

と、子供たちはいろ〳〵無邪氣な話を始めるが、一人が話すのを周圍の友達がにこやかにうなづきながら聞いてゐる。『兵隊さんが鐵砲をうつてゐたよ……』といふ言葉の奥に動いてゐる表情と態度とには幼兒のみが表現し玩味し得るあるものがたゞよふてゐる。この和やかな情景に心をひかれた僕は興深く子供達の會話を聞き取らうとしたが、すぐ近くに居る子供の外は殆ど聞き取れない程の靜かな話振りである。しかし叱られるのを恐れての小聲では決してなく、丁度その子の今の心もちに最もふさはしい調子である事が、そのやわらかな表情で明に感ぜられる。『他の人が話してゐる間は待つてゐて、順々に話して行くのですよ』との訓言を用ゐずして、しかも用ふる以上の境地が開かれてゐる。

我が**皇國日本**は昔より**神ながらことあげせぬ國**であつて、言葉を用ひずして**彌榮の大道**を**まごころ**を以て顯現して行くを理想としてゐる。故に、たとひ言葉を用ふる時にも末葉に拘泥せず其根幹の精神の發揚に努むべきものである。僕はかゝる理想が今この『**幼兒の天國**』に如實に顯現してゐるのを感得して畏敬と共になつかしき念に耐えなかつた。あゝ我等は常に幼兒をして斯かる**天國**に安住せしめたきものである。

（皇紀二千五百九十二年九月三十日　日本國民　大塚喜一謹記）

前號訂正

頁	段	行	誤	正
五二	上	七	理解するといふ事はない	理解するといふ事は出來でも融化するといふ事はない。
五二	下段五行目より九行目まで上へ一字詰める。			
五二	下	一〇	欲永	欲求
五四	下	一六	なき	き
五五	下	一三—一四	「同時に……ない」の「　」トル	
五六	下	一六	『吾等の雜誌幼兒の教育』	吾等の雜誌『幼兒の教有』